大正期から始まる奈良県生駒地方の里親村の概要

○　鳥取短期大学　　菅田　理一（3416）

菊池　義昭（淑徳大学・000095）

キーワード：里親委託、里親村、養護実践史

１．研 究 目 的

わが国の「新しい社会的養育ビジョン」（2017）で指摘されているように、今後は里親あるいは小規模施設での家庭的な養護を推進することになっている。しかし、児童福祉法が里親制度を規定する以前の里親については、その実態が十分に解明されていない現状にある。そこで報告者は、わが国の里親の歴史に関する先行研究を参照しつつ、里親制度における養護実践の歴史的な展開の内容を解明し、その特質および固有性を分析する研究を進めることにした。

２．研究の視点および方法

戦前期までの里親委託を分類すると、①福田会育児院に見られるような創立期から里親委託を推進し、学齢期に達した院児を施設で引き取り、引き続き養育する形態（里親委託と施設の養護が一体的に実施される形態：一体型）、②岡山孤児院に見られるような創立期は施設での養護を行いながら、その後必要に応じて里預制を導入する形態（施設養護と里親委託が連携する形態：連携型）、③京都府の洛北地方や奈良県の生駒地方の里親委託に見られるような、地域の中で多数の里親が里親村を形成する形態（地域の中で里親委託が組織的に実施される形態：地域型）の３つのタイプに分かれると仮定できる。このうち本報告では、これまで研究がほとんど進んでいない奈良県の生駒地方の里親委託（地域型）に関する史資料を収集して明らかになった概要をまとめ、今後は、これを基礎にしてその特徴と歴史的役割を分析する。なお、以下の内容は、『生駒市誌Ⅴ（通史・地誌編）』（1985年、273‐276頁）、錦峯生「生みの親より育ての親」『子供の世紀』20巻11号（1942年11月、20‐21頁）等を基礎資料としたが、個別に註は省略する。

３．倫理的配慮

本研究では、一般社団法人日本社会福祉学会研究倫理規程にもとづき、福祉サービス利用者について述べる場合は個人が特定されないように配慮している。

４．研 究 結 果

奈良県の生駒地方が里親村として有名になったのは、「高山を中心に、鹿畑から北倭村全域に亘って広く行われたから」であり、「大正の頃から、個人的に預り、人伝えによって漸次増加していった。大阪方面からの委託が殆んどであった」と『生駒市誌』は記している。生駒地方は、奈良県北西部の大阪府に隣接した農村地域であるが、大阪市への働き手の供

給地域としての側面もある。旧北倭村を流れる富雄川は、大阪湾に注ぐ大和川に下流で合流しており、生駒地方と大阪市をつないでいる。さらに、同村は近代化の過程で、収入の少ない状況にあって村民の協力体制を構築し、模範村になった経緯が確認できた。このような地域性は、同地方での里親委託の展開を可能にした。具体的には、昭和初期頃から大阪市と生駒地方を行き来し、大阪市に働きに出る者の世話や茶筅製造等の竹細工の伝統産業を行っていた井藤敬治郎（1896－1950、現生駒市高山町）が、大阪で里親の斡旋を頼まれて、自宅に子どもを預かり養育した。次第に里親委託にも関わることになり、その里親委託は「大阪府の外郭施設である保嬰館」と「大阪市の外郭団体である弘済会」により、井藤敬治郎と旧北倭村役場を通じて実施されるようになった。同村では、「北倭村愛育会」を結成して、受け入れ体制を整えていった。「昭和10年頃には、300名を越えるようになり、戦時中は疎開と食糧難も加わって急増し、700名に及ぶ里子数となった。」そして、「村の戸数の三分の一以上の家庭が、里親の経験者になった」とある。さらに、大阪府知事が里子と里親を表彰する制度ができ、1943（昭和18）年5月21日に日本児童愛護連盟会長荒木貞夫大将（陸軍大将・元文部大臣）が視察に訪れ、井藤氏（里親会会長）を訪問したが、敗戦後の1947（同22）年の児童福祉法制定により里子数が減少していったという。また、「生みの親より育ての親」によると、大阪乳幼児保護協会から里子の委託を受け、井藤敬治郎が里子監督を務めていたと記していた。そして、生駒地方の里親委託の中心人物であった井藤敬治郎の活動については、ご子息で社会福祉法人北倭保育園理事長の井藤一憲氏から史資料の提供を受けることができた。

５．考 察

このように奈良県の生駒地方の里親村は、地域の中で里親が養育する形態（地域型）に該当することが、史資料から確認できる。その成立の背景には、収入の少ない農家が多く、竹細工の産業（現在も全国的に名高い）を副業とした地域であったため、大阪市内の個人や組織から里子を受け入れることも、副業の１つになっていったと仮定できた。つまり、大阪市という都市化した地域の近郊にあり、村の経済的発展のために里親委託事業が必要となり、それが里親村の成立する地域的背景になっていったと言えよう。また、井藤敬治郎が、里子の斡旋や監督役としてコーディネートを担っており、里親村の発展の基礎となっていたと見ることができた。今後は、生駒地方の里親委託の研究のため、さらなる資料調査及び分析が必要であると考えている。特に、里親委託された里子が、その後どのような支援を受けて成長したのか、その間の生活はどうであったかの歴史的な展開を解明し、地域型の里親委託における養護実践の歴史的な意義と役割を明らかにする研究を実施していくことにする。

〔謝辞〕本報告は、科学研究費助成事業・基盤研究（C）（課題番号19K02289）の助成を受けた研究の成果の一部である。